



# ゆずり葉

にのみや学園  
二宮町立山西小学校  
学校便り「ゆずり葉」  
第 117 号  
山西小学校 72-3777

## 子どもらしく、 全力で取り組んだ運動会(木)

直前の連日のぐずつき模様が一転し、当日は朝から運動会日和となりました。保護者の方々も地域の方々も、朝から大勢いらしてくださいました。開会式での子どもたちの元気な応援の歌声に、会場の誰もが高揚した気分になりました。

**徒競走** 一・二年生は 50 m、三・四年生は 80 m、五・六年生は 100 m 走りました。誰もが最後まで勝負をあきらめずに走り抜く、真剣な姿がありました。

**表現** 一・二年生は笑顔で体いっぱい大きく動かして楽しく踊る姿がありました。三・四年生は、フラッグのきびきびした一体感ある動きが素晴らしいかったです。五・六年生は、地域からお借りした祭り衣装をまとい、漁師さんからの力強い動きと掛け声でした。



**綱引き** 見ている方も思わず力が入ってしまうパワーゲームでした。引き分けも交えつつ、練習時とは異なる勝敗結果となりました。

**色別対抗リレー** 昼休みに練習し続けてきたバトンパスを生かし、抜きつ抜かれつの勝負。皆の声援を受けて、最後まであきらめない姿がかっこよかったです。

**閉会式** 得点発表は、どうしても勝敗による気持ちの明暗がついてしまうものですが、今年のスローガンにある「全力的でいこう」の達成はもちろんのこと、「心のバトン」の意味では、互いの気持ちをたたえ、ねぎらう拍手が自然に出てきたのは清々しかったです。

## 「たてわり班活動」で培われるもの

「たてわり班活動」は、異学年の子どもたちが一堂に会して、一つのことに取り組む貴重な機会です。時期に応じて遊び場所をローテーションし、教室・体育館・校庭を交代で使います。



このような活動をうまく進めるには、やはり六年生の気配りと行動力が大切です。リーダーとして一学期からうまく立ち回ることができない場合もありますが、周りの下級生が察して事なきを得ることもあります。

このような活動で対話する中、学年を問わず、子どもたちには提案する力、折り合いをつける力が高まっていきます。また、下級生は上級生になったときの立場と振る舞いを見て学んでいきます。

## 言葉は心のよりどころ 少しの勇気やほんの機転

言葉で楽しく明るくなることもあれば、腹立たしく傷つくこともあります。子どもたちに学校・家庭・地域の日常生活の中で例示しながら指導していくことはもちろんですが、われわれ大人も自分自身の態度について襟を正していかねばと身の引き締まる思いです。

**五月の朝会** 「日常の五心」について、「みんなにいつでも心がけてほしい五つの大切な心がまえ」として、概略、こんな話をしました。

(1) 『はい』という素直な心は、とても気持ちがよいこと、自分の存在表明となること。



(2) 『すみません』という反省の心」は、失敗を成長に変えていく力があること。

(3) 『私がします』という奉仕の心」は、学校やみんなの社会のためにもなるし、自分の成長にもなること。

(4) 『おかげさま』という謙虚な心」は、日本人のよさとして世界から認められていること。

(5) 『ありがとう』という感謝の心」は、自分も相手もいい気持ちにしてくれること、みんなが仲良く優しくなれる魔法の言葉であること。



**六月の朝会**

「最近、私が『見て』『聞いて』『うれしかったこと』について話しました。

(1) ある日の放課後、地域の方が路地で掃除をしていたところ、本校のある児童が通りかかった際、「手伝いましょうか？」と声をかけたそうです。その方はそのことに感激して、学校にお電話してくださいました。

(2) 先日、校内であるクラスの授業を見ていたとき、座席が前の児童から送って画用紙を配っていました。先生の指示で一人4枚ずつ取ることになっていましたが、私は、ある列の中間にいる児童が4枚ずつの束にしているのを見かけました。

善い行いをしている児童は、本当はもっとたくさん

いるはずで、今回のものはたまたま把握した、ごく一部にすぎません。しかし、これらのどちらも、誰かの指示があったわけでもなく、その場で自分の判断とアイデアによって行動したことが素晴らしいと思います。

**栽培活動を通じて、科学の目と命を大切にすることを育て**

子どもたちは、小学校に入ると教科等の学習として、植物を栽培する経験を積み重ねます。今年の一年生は生活科でアサガオを、二年生も生活科で夏野菜を、三年生は理科でホウセンカやヒマワリ、マリーゴールドを、四年生は総合でサツマイモを育てています。

「科学の目」とは、ここでは教科の学習において「植物の成長過程やよく育つための条件」に気づき、考える態度であると考えます。何らかの方法で調べたり聞きかじったりするだけでなく、日々、土をいじったり水をやったりして大きく実らせたり、逆に枯らせて



しまったりする経験をする中で実感を伴う理解・知識は本物となります。実験・観察は、個別の事象や経験が一定の条件のもとで常にいえることかどうかを検証し、その道筋を論理的に整理する作業であり、「科学の目」を育てる強力な後押しとなります。

さて、その栽培活動は、やはり生きていくものが相手なので、科学的な生育条件を学んだからといって常に成功するとは限りません。鉢植えに意識が向かず水をやらない日が続けば、株がしなびてしまいます。また、良く育ってほしいと願い、たくさん水をやって「根腐れ」に、たくさん肥料をやって「肥料焼け」になることもあります。

自分の鉢植えですので、自分の気まぐれや独りよがりな考えで、きれいな花を咲かせたりおいしい野菜を実らせたりすることができなくなるのは残念ですし、かわいそうなことをしたという悲しい気持ちになります。農家の方々の苦勞に思いを馳せ、台所の食材を思い浮かべることもあると思います。

「心」と「科学の目」が上手に手を取り合えるよう、これからも日々の教科学習と栽培活動をおこなっていききたいと考えています。また、ご家庭での栽培経験で「科学の目」が開きかけをつくることも十分できると思います。

日頃の何気ない世話とそよ風の言葉かけが大切だと思えます。

